

小西の哲学を垣間見る

東北支部 阿部久雄

小西はある時期を境に、児童文学の世界から自ら想起した淡水大魚釣りの世界へ傾倒する。小西は、児童文学、釣り啓蒙書を通して、私達に何を問うたのであろうか。小西作品の文脈を辿ることで、それが何であるかを伺い知ることができるかもしれない。

子供たちに夢を与える小西の夢



東北大学図書館の鈴木女史のご教示によれば全国の国公立の図書館のデータベースの登録されている小西作品は概ね140冊（20タイトル）である。宮城県立図書館では6冊の児童文学作品が今も現役である。小西作品で最も古い作品とお尋ねしたところ、左の『裁かれるお伝』（昭和22年）に収められた「谷間の恋歌」であろうと。この短編集は小西茂木編となっているので小西が編集したものである。

しかし、あまりにも性格を異にする作者と作品の寄せ集めであるため、この点も、お尋ねしたところ終戦直後の紙不足を反映したものでこの時期には良く見られる体裁とのことである。昭和22年に、三冊の単行本を発売していることから、これらの作品は戦時中に書き溜めた作品であろう。小西の単行本は、昭和39年の『モヒカン族の最後』で本当に最後となる。

以後、高一コース、中三コースといった月刊誌への短編の執筆が続き、相前後して新聞、雑誌への釣りの投稿記事が増加する。

しかし、昭和42年の「淡水大魚釣り」のなかで『日曜の朝の公園の岸で鈴を振ると、1メートルもある魚がむらがって、子供たちの手のえさをなめにくる・・・私はそのような情景を空想するのです。そのような美しい朝が、やがて来るのであると信じたいのです。』と書いているから、児童文学を離れても子供達に健全な夢や希望を与える夢は失っていない。

淡水大魚釣りへの傾倒

小西が淡水大魚の啓蒙活動に本格的に傾倒するのは東京オリンピック以後であることは「釣りも科学的な基盤の上に立つスポーツとなった今では。」と記していることと昭和39年の『モヒカン族の最後』が最後の単行本であることから明らかである。小西52才のとき、戦前・戦後を通じて多くの淡水釣り実用書を著した佐藤垢石が、今でも名随筆との評価の高い「たぬき汁」を著したの

も52才のとき、残念ながら51才ではない。さて、小西は淡水大魚釣りの最大の魅力を「豪快な釣趣」とであると述べる。

- ・ 1mほどの大魚をヘラブナのように「寄せて」釣るのです。そこに私たちの釣り方のおもしろさがあります。その豪快な釣趣は荒磯の大物釣りに決して劣るものではありません。(淡水大魚釣り)
- ・ サオにかかる魚が大きく、引きが強ければ強いほど痛快なのは、言うまでもありません。・・・川と湖沼にはレンギョなどの大物もいます。しかし、コイは淡水大魚釣り番付の横綱です。(野ゴイ釣り)
- ・ でっかいやつほどおもしろい！(ソウギョ、レンギョ、野ゴイ釣り)

小西は淡水大魚釣りで、大人に少年時代の素朴で健全な冒険心を取り戻させ、健康で楽しく生きるコトを説こう想った。それには東の横綱のコイだけでは役者不足と考へて、大陸出身の弩級の大魚たちを番付に加えた。小西はスポーツとしての淡水大魚釣りは偶然に釣れるのではなく、科学理論に裏づけされた必然的に釣れる釣りである。これには釣技だけでなく、淡水大魚の生い立ちや淡水大魚の生態を研究する必要があった。

小西の科学観について

わが師 K・ポッパーは例外的に科学者から人気のあった20世紀を代表する科学哲学者である。ポッパーが、科学者から人気を得たのは反証可能性という概念から「科学は、他の学問とは違う」というお墨付きを与えたからである。

小西の魅力も同じである。小西は複数の著書を通して「淡水大魚釣りは、他の釣りとは違う」と論断した。ポッパーは反証可能性にさらされて生き残る理論を優れた理論と説いた。小西は『ソウギョ、レンギョ、野ゴイ リール釣り』のプロローグで「私は、これは良いと思う創案や工夫は秘密にしない。すべて公開する。そうすれば何千何万という人々に知られ使われ、本当に良いものだけが受け継がれていく。何が残り、何が見捨てられるかが分かる。本書は私ひとりではなく、多くの釣友の協力を得て到達した成果の集約である。」と述べた。

このような反証科学方法論を唱える科学哲学者は、昭和50年代でも欧米でも一握りである。また、どの分野においても新しいジャンルや方法論を開発して世に問うことは勇気がいる。なぜなら、科学的な理論や方法論は必ず反証(間違いとされる。)される運命にあるから。しかし、私達(反証主義の立場)は反証の繰り返しは科学理論から独善を排除するのに有効な方法であると考えている。小西は、自分の著作から独善を排除しようと努力した。独善を排除することは、すべての分野で、生き残り受け継がれるために必要な道徳である。小西の作品は科学的、かつ道徳的である。

小西は、今も私達に問いかけている

わが半生の旅路は険しく、荒野にふみ迷ったその日、ことばなく語りかけてきたのは野ゴイであった。心楽しい日々の道連れのとなったのも野ゴイであった。わが友、野ゴイ----たくましく、けなげな気風を愛す。(野ゴイ釣り)

小西茂木という名前も、やがては釣り人の記憶から消えていく。しかし、日本から川や湖沼がなくなならない限り、淡水大魚が生き延びるかぎり、淡水大魚というコトバとともに小西茂木の険しいが、心楽しい釣りは続くのである。

小西は、今日も、私たちに問いかけている。

新しい道具、釣技、スタイルを考えるのは楽しい。しかし、楽しいことは釣り人を独善や押し付け(説得)という押し穴に陥れる。良いコトとモノは自ずと多くの釣り人に受け継がれ語り継がれていく。そうでないコトやモノは釣り人から淘汰され、釣り人の記憶から自然と消えていく。釣り人にとって良いコトとモノは、釣り人の冒険心と好奇心を揺り動かすエキサイティングなコトとモノである。心楽しい日々を過ごすためのエキサイティングなコトとモノを発見するのが淡水大魚釣りという実験である。実験の結果に意味を付けるのが研究である。小西の実験と研究の繰り返しは、健全で心楽しい日々が長続きすることを発見する方法論、すなわち哲学なのである。(了)